

## 関西大学国文学会彙報

### 二、関西大学国文学会研究発表会

#### ◇第一回国文学会研究発表会

新型コロナウイルスの影響により不開催

#### 一、令和二年度関西大学国語国文学専修年間行事（一部予定）

令和2年5月

二年次生行事、新型コロナウイルスの影響により中止

7月

第一回国文学会研究発表会、新型コロナウイルス

ウイルスの影響により不開催

10月27日(火)

三年次生就職・卒論セミナー

（千里山キャンパスにてオンライン開催）

11月26日(木)

院生合同学術研究大会

12月19日(土)

第二回国文学会研究発表会

（オンライン開催、後掲）

令和3年3月23日(火)

新二年次生対象専修別履修ガイダンス

（国文学会主催ポスターセッション併催）

#### ◇第二回国文学会研究発表会

日時 令和二年十二月十九日（土）午後一時五〇分より

会場 Zoomによるオンライン開催

研究発表

「熊野信仰における女人往生譚の形成」

本学大学院博士課程後期課程 小川路世

「池田みち子「国際都市」論―「新秩序」下の光と影―」

本学大学院博士課程後期課程 邵金琪

「三島由紀夫『につぼん製』論―大衆文化にみる戦後像―」

本学大学院博士課程前期課程 橋本大輝

講演

「御子左家の和歌研究と書写活動」

本学准教授 岸本理恵

### 三、関西大学国文学会研究発表会 発表要旨

なお、成稿し、本号に掲載したものについては省略した。

#### ◇第一回国文学会研究発表会

不開催のため発表者なし

#### ◇第二回国文学会研究発表会（十二月十九日）

##### 研究発表

「熊野信仰における女人往生譚の形成」

小川 路世

本発表では、熊野信仰を唱導する「熊野の本地」に語られる「五衰殿女御譚」や「熊野観心十界曼荼羅」が、立山という山岳修験の聖地で唱導されていたモノガタリに直接的な影響を与えていたことを指摘した。特に、立山において唱導された女人往生を約束するべく営まれた儀礼が、熊野信仰を先例として形成されてきたことを考察した。

熊野比丘尼らが「熊野の本地」とともに所持し、唱導用に持

ち歩いた「熊野観心十界曼荼羅」には、女性のみが墮ちる地獄が描かれている。「往生要集」には、經典に基づいて、六道の様子や地獄の恐ろしさ、極楽浄土の荘厳さが記されているものの、女性のみが墮ちる地獄は確認できない。しかし、「熊野観心十界曼荼羅」、そしてその影響を受けて図像化された「立山曼荼羅」には、女性のみが墮ちる地獄も描かれている。

さらに、立山で営まれた女人往生を勧める儀礼「布橋大灌頂法会」の意義を、「熊野の本地」に語られる「五衰殿女御譚」の影響下に読み解いた。「熊野の本地」には、五衰殿女御が出産の後に死に、『法華経』の功德をもって天道（天・天道・天界道）に神として転生（熊野に垂迹することを意味する）し、さらに極楽往生を果たすモノガタリが語られる。立山で営まれた、擬死再生儀礼と意義付けられる「布橋大灌頂法会」は、熊野信仰を唱導するにあたって論拠とされた『法華経』利益譚の系譜である、「死を体験したのちに蘇生する」という過程を有する。立山が女人往生を説くにあたって、「熊野の本地」に語られる五衰殿女御の生涯をモデルとした可能性を指摘した。

「池田みち子」「国際都市」論―「新秩序」下の光と影―

邵 金琪

「国際都市」は、昭和二十四年一月一日の『日本小説』新特大号に発表された池田みち子の中編小説である。全文が発表される前に、その冒頭の一部は「邦人商社」という題目で、昭和十九年三月に『三田文学』で発表された。池田みち子の「上海ものの総決算」と言われた作品であるが、先行研究は僅かしかない。

本作は一九四〇年の上海を舞台とし、邦人商人の一日を中心に展開された。主人公の正好のような中小商人の商売の基盤は極めて脆弱であった。盧溝橋事件後、日本政府が「新秩序」の建設のために経済開発を始め、国策会社も次々と設立されたなか、中小商人は失業したり、商売できる商品がなくなったりするなど、生活空間が圧迫された。しかし、彼らは「新秩序」の波に晒されながらも、生き抜こうとしている。池田みち子は、中小商人たちを取り上げることで、そのたくましさを描き出している。さらに、正好によって財閥を批判させることで、居留民社会の対立を明確にしている。

また、作品に登場する中国人たちは商売上手で、今までサポート役として、日本人経営の会社で勤めていたが、経営状況が難

しくなった現在は、彼らと連合するのは正好のような日本人商人にとつて、最後の巻き直しの一手になるかもしれない。小説の結末は、「東亜新秩序声明」に書かれたように、「日満支三国相携へ、互いに互助連環の関係を樹立する」ことを暗示していると考えられる。本作に登場する中国人や他の国の人によつて、「国際都市」上海の複雑さが鮮明になっている。

日本軍や日本政府が掲げる上海再開政策の波に乗っている日本の会社が急速に発展していく反面で、良心の抜け穴をこしらえてお金を稼いでいる人々の生活は、まさに戦時上海に存在する闇の部分である。「国際都市」の創作にあたり、池田みち子が意識的に「新秩序」を背景とし、上海日本社会における大きな変化と各国の人々の生活実態を再構築しようとしていることを本論で明らかにする。

「三島由紀夫」につぼん製』論―大衆文化にみる戦後像―

橋本 大輝

三島由紀夫の『につぼん製』は、昭和二十七年十一月一日から翌年一月三十一日まで、『朝日新聞』の夕刊に連載された。柔道家青年の栗原正とファッションデザイナーの春原美子の恋愛関係の顛末を中心とした通俗小説である。『につぼん製』は、

エンターテインメント色の強い、コミカルな作品であるためか、先行研究は管見の限り見当たらない。

しかし、三島は『につぼん製』の連載の前年十二月から半年に及ぶ世界旅行に出ており、帰国して半年後に描かれた本作品は、三島の海外文化に対する眼差しや、国際社会における日本文化の捉え方を見る上で重要であると考えられる。

本発表では、当時海外で人気を獲得しつつあった柔道や、パリ文化の流行に着目しつつ、『につぼん製』に見られる三島の「につぼん」観について論じた。

第一章「交錯する柔道とファッション」では、「作者の言葉」に注目しながら、当時の新聞記事などを手掛かりに、日本の柔道文化とパリのファッション文化が、実際にどのようなように交わっていたのかを検討した。

第二章「柔道と作品の関連」では、主人公である栗原正が、柔道家青年として描かれていることに注目し、三島の柔道に対する関心や、作品内容と柔道の関係について考察した。

第三章「パリが見せる「夢」と「現実」」では、柔道に対応するもう一つの流れであるファッション文化に注目した。特に、作品連載当時の日本社会におけるパリへのあこがれに目を向け、当時の流行に対する三島の視線と（パリ）というイメージ

が、作品内で、どのような役割を果たしているのかを検討した。

第四章「三島の描く「につぼん製」とは何か」では、フランスへ発信される「柔道」と、日本が憧れる「パリ」が、作品内でどのように交わるのかを検討し、『につぼん製』のなかで、一体何が「につぼん製」であるのかを考察した。「ジュード・ド・パリ」という作中で美子が制作した衣装に注目し、「につぼん製」という言葉が、日本らしさと西洋文化の重なり合いを示すものとして使われていることを明らかにした。

#### 講演

「御子左家の和歌研究と書写活動」

岸本 理恵

平安時代の文学作品には著名な作品が多くあるが、ほとんどは平安時代の写本が現存せず、鎌倉や室町期、さらには江戸の写本で読んでいるものもある。藤原定家の関わった写本は、そうした平安文学作品において鎌倉前・中期の書写という点でも貴重であるだけでなく、後世への影響の大きさ、精力的な書写により多くの写本を残すという点において、特に重要であり注目されてきた。

また、写本は成立以来何度も転写を重ねたものでそれぞれ特性があるので、平安の作品を読むにはその特性を知ったうえで

写本と向き合う必要がある。一般的には同一作品の複数の写本を比べて本文異同等を考察しつつ、いわば縦の繋がりの中でそれぞれの写本の特性を見出す。しかし写本の特性を知るには、どのような人々に、どのような目的で、どのような本として書かれたのかという写本群としての視点、いわば横の繋がりをもって見ることもまた重要と考えている。

講演ではこの問題意識から、まずは定家の写本のあり方を紹介して特性を確認した。外題や内題の様子、写本の大きさや料紙・表紙の共通性、定家の書写部分と書写を支えた側近筆の関わり、写本の内容など、zoom画面で図版を示しつつ傾向や特性を見た。定家の監督書写という方は現在では既に認められているが、その資料は私家集に限ることなく、その他の和歌集、歌学書や物語にも及ぶ。つまり定家の監督書写による写本群は、定家の和歌や文学研究の基盤をなす資料として書写されたものであることが見えてくる。

そしてこの方法が父俊成と重なるもので俊成の実践を取り入れていたことについても、既に知られている資料も含め資料として提示し、定家との類似性を確認した。俊成監督書写本の中には、現在では定家の外題が付されるもの、定家の書き入れが施されるものも多い。俊成から方法も典籍も受け継ぎ取り入れ

つつ、家の本として写本群を発展させていった様子が確認でき

る。こうした俊成・定家と引き継がれる書写方法と古典籍は、定家の息が家にも継承されたものが為家監督書写本である。現存する俊成・定家監督書写本の副本を指摘した痕跡のものもあり、御子左家が歌の家としての営みを継承している様子が明らかである。ただし、為家監督書写本については定家などに比べ研究歴が浅く、装飾料紙を用いた本の存在など、解明していくべき課題も多いものである。

#### 四、平成三十一年度卒業論文・修士論文・博士論文題目

◇平成三十一年度 国語国文学専修 卒業論文

##### 〈国文学〉

池田憲ノ佑 百人秀歌・百人一首研究の課題点

磯崎 裕香 『落窪物語』の服飾・容姿表現

野木 将希 村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダー

ランド』論

―二つの世界の結末について

稲田 葵 『勸信念仏集』からみる女人往生

伊部 敬太 「金銭処理」から見出す、弥次喜多の人物像・作品の影響

今井 優花 人身御供譚

―「動物神」と「生贄」に関する考察―

今川 洋介 村上春樹『ダンス・ダンス・ダンス』論

―主人公「僕」の変化と、心の回復―

今津 奈緒 『南総里見八犬伝』における犬坂毛野の人物像

岩井 里奈 平安末期から中世の幽霊像

―『今昔物語集』の幽霊を通して―

上田 希 実朝歌の自己投影に関する考察

―『金槐和歌集』内の鳴く歌を中心に―

植田万梨乃 村上春樹『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡

礼の年』論

―つくるの存在するリアリズム世界―

上野 楓実 山田詠美『PAY DAY』論

―双子の関係を中心に―

梅村 美彩 『浪花色八卦』における八卦の意義

大澤 仁美 漫画『ONE PIECE』歌舞伎化の成果と問題点

太田 凌輔 『因果物語』にみる鈴木木正三の思想

大原 朱音 満野長者の祝儀性

―御伽草子『文正草子』との内容比較から―

越智 陽菜 和泉式部の夏の月詠歌

嘉久志春菜 円地文子「女面」論

―梅尾三重子を中心に―

鍛冶秀一郎 『今昔物語集』巻第二十五の構成

金沢 宏芳 藤枝静男「空気頭」論

―私小説における「自己」―

川瀬 志織 新美南吉「うた時計」論

―定められた時代へのメッセージ―

喜多 晴菜 国語教育と『伊勢物語』

―高等学校国語教科書の調査より―

北岡さと子 石上乙麻呂関係歌群についての一考察

北林 未来 百物語作品群における女人蛇体

木元 梨絵 堀辰雄「ルウベンスの偽画」論

―二人の女性からみる理想の女性像をめぐって―

串田菜々美 小町の歌から見る小町の姿

楠本 倫子 一品の宮論

―『狭衣物語』における彼女の立ち位置―

河野日向子 宮本百合子「貧しき人々の群」論

―人間らしさの模索―

河野 祐太 吉本ばなな『哀しい予感』論

—ゆきのの人物像に注目する—

小寺 雪月 高山石近像の形成

—キリスト教禁教下において—

後藤将一郎 太平百物語における狐譚

境谷 元貴 大江親兵衛の「仁」と成長

坂口 華苗 『とりかへばや物語』における性

—田辺版と比較して—

迫 杏奈 伊東整『街と村』論

—母胎回帰による転生としての救済について—

佐藤 友香 三代集の哀傷歌

澤 未桜 夏目漱石『こころ』論

—教材「こころ」をどう読むか—

塩見 遼太 卷二三・三三〇二番歌の「弓腹振起」について

—現代の弓道の知識から—

柴田明日香 『平家物語』「剣巻」から読み解く天叢雲剣

荘司 彩香 石川淳『焼跡のイエス』論

—少年の訴えと今後の可能性について—

杉 圭悟 「行為が語る心情」

—『源氏物語』より—

鈴木 悠真 『百人一首』と『三十六人撰』の比較による、定

家と公任の撰歌意識の考察

須藤 利季 田山花袋「一兵卒」論

—「死」を中心に—

関野 日久 継体天皇の時代

—『日本書紀』の中の磐井の乱—

武市 広紀 南北が表し役者が伝え続ける「お岩」という怨霊

—について—

竹内 優衣 観音利益譚における姫君の幸福

—「うばかは」鉢かつぎ』『花世の姫』の比較を通して—

竹村 早織 『枕草子』における動物観

—猫を中心に—

巽 百花 一寸法師の変遷

—洪川版御伽草子と巖谷小波『日本昔噺』を比較する—

田中 瑠夏 『繁野話』第三話における異類婚姻譚と異類像

時吉 晃司 源氏物語の遊離魂と後妻打ち

常盤 健太 三島由紀夫『夏子の冒険』論

—夏子の抱える「情熱」を探る—

中島 葵 福永武彦『飛ぶ男』論

—「マラルメ」「窓」を通して見る〈回生〉の物語—

中森 早紀 『源氏物語』の書と筆跡

—末摘花の筆跡を中心に—

中屋 穂香 三島由紀夫『春の雪』

—悲劇の原因—

中山 美樹

安部公房『第四間水期』論  
—安部公房の未来観をめぐって—

村垣 りん

梶井基次郎「Kの昇天—或はKの溺死」論  
—「K君」を悼む「私」—

長島 友斗

平家物語「敦盛最後」の中心人物の違いについて

森田 彩那

とりかへばや物語における「宿世」の使われ方

西方 美樹

徳田秋声「あらくれ」論  
—お鳥の人生と取り巻く人々—

森村 元

井伏鱒二「黒い雨」論  
—成立背景と登場人物の役割から考える主題—

橋本こころ

川端康成「舞姫」論  
—三人の舞姫を中心に—

山口 駿

『宇治拾遺物語』「鬼に瘦取らるる事」考  
猫の印象の変化

畠井 桜奈

『とりかへばや物語』の姉から見る女性問題

山田 桃花

—『源氏物語』を通して—

弘田 理奈

谷崎潤一郎「肉塊」論  
—美しい夢をめぐって—

吉田 穂波

黄表紙にみる近世の異類合戦物

邊見 泰章

百人一首と百人秀歌  
—その成立順をめぐって—

吉鶴 涼太

『百人一首』英訳比較  
美人画お仙にみる漫画キャラクター

星野明日香

「ごんぎつね」「手袋を買いに」「牛をつないだ椿の木」「和太郎さんと牛」の関係性と作家  
—新美南吉の伝記と絡めて—

石塚 寛史

可能動詞「カツ」「アフ」に関する訓  
—万葉集巻七・二四五番歌、巻十一・二四七〇番歌について—

益留 愛乃

京伝の黄表紙作品から見る「忠臣蔵」

大西 純平

『今昔物語集』における鬼の姿  
『喜能會之故真通』におけるエロテイシズム  
—人と人との交わり、人と蛸との交わりについて—

松井菜々子

源氏重代「髭切」をめぐって  
—『平家物語』「剣巻」から考える—

吉井 沙奈

和泉式部続集『帥宮哀傷歌群』についての考察

松原さくら

夏日漱石『三四郎』論  
—西洋美術をめぐって—

村尾ひかり

『源氏物語』の結婚とジェンダー  
—紫の上と明石の君を通して—



〈国語学〉

青山 結衣 テレビドラマのタイトルにおける表記とその効果

安藤 拓海 プロ野球監督のシーズン抱負の内容の変遷について

池田 将樹 接客用語の使用意識と使用実態

井脇 佑莉 料理本の加工表現について

上東 育美 五條市方言のラ行五段化における世代差

上村 達也 プロ野球選手の名前から分析する日本における男性名の変化

江口 蘭奈 『平家物語』におけるオノマトベの効果・役割

嘉藤 慎二 変化球の名称について

―各メディアにおける使用実態と認知の実情を探る―

金子 綾沙 勧誘談話の構造と展開

唐澤 愛 日本酒の銘柄からみる特徴と傾向

久次米 慶 マンガにおけるオノマトベの表記

―切るオノマトベの使用差異―

坂本 佳世 京都府福知山市出身者の移住における言語変容について

鮫島 円香 小説における役割語としての関西弁

下村 隆人 『三国志演義』における役割語と属性表現

高瀬 廉 「シュッとした」の世代差・地域差による許容度について

滝口 雅紀 『鈍字集』における漢字の構造とオチの分析

田中 響子 接尾語「さ」+「ある」の用法とその変遷

田中 里歩 「絶妙」の意味・用法の変遷

徳谷 和樹 「普通に」が示す程度

―「とても」と同一視すべき表現か―

永井 日和 「白雪姫」3作品からみる対象年齢別の言語表現

長山 拓海 M-1グランプリで考える現代の「ツッコミ」の傾向

野口 翔太 文体差から見る接尾辞「的」の用法

畑 あやか 音象徴のジェンダーイメージを活用した女性

ファッション誌のネーミング

林田万由子 助数詞「個」の用法の拡大について

藤井菜々子 『安珍清姫伝説』からみる説話に登場する悪女について

藤本ひかる お菓子・パンにおける味・食感の表現方法

牧野 花菜 アイドルオタクの言葉の変遷

松本 理花 ポーカロイド曲における歌詞表記の特徴

森 康貴 大喜利のお題と解答の構造

柳井 千咲 ゲーテ作『ファウスト』の複数の訳からみられる

人称代名詞の比較と考察

山田 葉月 奈良県下市町方言の世代間の伝承について

横畑 達哉 「TUBEとサザンオールスターズの楽曲タイトルの分析」

小林 葉南 動詞・名詞・形容動詞の形容詞型活用について

立松 千知 歌詞におけるあて字の使用実態

◇平成三十一／令和元年九月期 修士（文学）取得論文

### 〈国文学〉

李 博文 大伴旅人亡妻挽歌の研究

―旅人の悲嘆をめぐって―

中嶋 仁志 『宇治拾遺物語』の「笑い」について

―『今昔物語集』と比較して―

◇令和二年三月期 修士（文学）取得論文

### 〈国文学〉

阿部 彩乃 俊成監督書写本の書写者に関する一考察

―伝西行筆『一条摂政御集』・『出羽弁集』・柝形本『曾丹集』を中心に―

梅谷 翔也 放屁描写における研究

佐藤 芽生 『南総里見八犬伝』における「情態」描写の考察

瀧下真莉耶 狐をめぐる異類婚姻譚の形成

松山 哲士 筒井康隆「虚人たち」論

―内面世界との関わり方をめぐって―

矢田貝隆也 城山三郎『大義の末』論

―根幹としての〈大義〉と時間性―

辻 秀平 川端康成「虹いくたび」論

―〈生〉の希求／彷徨の物語として―

西川 侑希 日本古典文学に見えるささがにをめぐる表現

―和歌を中心として―

梁 三芳 円地文字「妖」論

―ジエンダーの視座から―

### 〈国語学〉

王 春霞 日本漫才と中国相声の比較

―談話構造に着目して―

八坂 尚美 『虎明本』と『狂言六義』における行為要求の対

照

◇平成三十一／令和元年九月期 博士(文学) 取得論文

〈国語学〉

利岡 真帆 日本語の弔辞談話に関する歴史社会言語学的研究

◇令和二年三月期 博士(文学) 取得論文

〈国文学〉

顧 琦淵 異端者の〈創世記〉

―安部公房『壁』の研究を中心として―

斎藤 佳子 遠藤周作文学におけるキリスト教描写

―『沈黙』以後から『侍』の変遷に着目して―

